

教職をめざす みなさんへ

教育実習の意義・目的と実践

明豊中学・高等学校

副校長 杉安 正徳

「先生」とは、この世に生を受け、様々な体験を通して得た知識や経験を次の世代の者たちへ教え育むことであり、それこそが「教育」の原点です。人は集団（村）になると、海外では教会が出来ますが、日本では学校（寺子屋）ができます。学校は様々なことを伝導する場でもあります。



では、良い先生とはどのような先生のことを言うのでしょうか？優しい先生？面白い先生？教え方が上手い先生？…私が思う良い先生とは、児童・生徒のことを思い、直ぐに行動に移せる人です。良いことは褒め、悪いことは指導をし、人生に夢や希望を持てるような話を、情熱をもって語る人こそが良い先生だと考えます。

あなたが教師を目指したきっかけや教員免許取得を目指した理由は何ですか。そのようなことを考えた「初心を忘れず」にチャレンジしてほしいものです。

教育実習先の学校では、校長、教頭、養護教諭…教育実習生も含めて、そこに勤務する全ての人が子どもにとっての「先生」になります。子どもは、教育実習生には年齢の近い若い先生として親近感をもって接してきます。しかし、その親近感に甘えずに、教師としての自覚をもって接しなければなりません。

教育実習では、①あなた自身にとっての良い先生を目指す。②座学で得た知識を現場で試すチャンスと心得る。③指導に必要な資質を高める。以上3つを目標として、教育者であると同時に被教育者としての自覚をもって取り組んでほしいものです。

実習では、「準備過程」としてのオリエンテーションで、担当クラスや指導教員、日課表等の他にも、各学校での注意事項や勤務時間を確認することが大切です。「導入過程」では授業観察を行い、「実習過程」では指導案作成や体験授業にもチャレンジし、「整理・反省過程」では翌日の実習に活かす取り組みを、「研究授業」では前日までに先生方に指導案を配布して指導を仰ぐようにしたいものです。

実習中の注意点は、①実習本来の目的を忘れずに、常に教師という立場で行動する。②流行言葉やため口は使わず生徒や教職員に対して礼儀正しく、積極的に挨拶を行う。③服装や髪型は、生徒が集中力を欠くような姿にならないように清潔さを保ち、常に名札を身に付ける。④昼食や飲料水は各自で準備をし、公共交通機関を利用して出勤する。⑤実習生控室は綺麗に保ち、施錠を心掛ける。⑥学校敷地内は全て禁煙である。⑦実習ノートはその日の内に仕上げて指導教員に提出する。⑧実習で知り得た学校・生徒に関するすべての情報は、家族を含めて一切口外してはならない。生徒とのライン交換等ももつての外である（守秘義務・個人情報保護）。

子どもたちは教師をよく観ています。心から授業を楽しんでいない教師に教わっても、生徒は楽しくありません。授業の準備万端だと心に余裕が生まれ、笑顔で対応できるようにもなるし、生徒との掛け合いの間もとることが出来るようになります。肝心なのは「スキルとハート（情熱）」です。教師の「あ・い・う・え・お」、「あ」明るく、「い」生き生きと、「う」受け止めて、「え」笑顔で、「お」面白く」を心掛けましょう。

1クラス40人には40通りの生きざまがあります。子ども一人ひとりに異なる生活があり、教師が知る努力をすれば自然と子どもが頑張っている姿が観えてくるようになります。

今の子どもに必要な能力は、①情報コントロール力、②コミュニケーション力、③ストレス解消力と言われますが、最も重要な能力は、近い将来に必ずやってくるであろう大災害時に「1人で生きていける力」だと考えます。「窮地に陥っても諦めず、

立ち直っていく力」を培っていくことが重要です。これからの社会は益々変わり続けていくでしょうが、それに立ち向かう「逞しさ」としての心の体力・体の体力や「人としての道徳性」や知恵を生み出すための「基礎基本の定着」が必要で、世界のどこで暮らしても、粘り強く、明るく元気で信用できる人間として認められる人間づくりこそが重要なことだと感じています。

このような「生きる力」を身に付けさせるためにも、一人の教師として「夢」や「未来」を語れるようになってほしいと願っています。実習が実りあるものとなることを願っています。

～「日々成長」を心がけて～

別府大学 国際経営学部

教授 岩本 貴光

誰しも教員を志す人たちは、大きな夢や希望を描き、いい教員になろうと考えていると思います。半面、いざ現場に立ち児童・生徒たちと触れ合う中で、徐々に不安を抱き、教員であることの責任を重く感じ、人の一生を左右する存在ということを自覚していきます。私自身もそんな思いを持ち日々教員生活を送っていますが、ここで私が教員を志した経緯と現状を紹介します。



私が教員を志したのは幼少の頃からです。教員だった私の母は、休みの日に、よく我が家にクラスの児童たちを招いて家の前の広場でソフトボールやドッジボール等をして休日を過ごしていました。時には、焼き芋の焼き方や、カレーライスの作り方を教えたりしていました。母親の常に児童たちと同じ目線で活動を楽しみ、触れ合い寄り添う姿、それらに児童たちが嬉しそうに仲良く協力して学びを得ようとする姿をみて、「将来、こんな嬉しそうな顔を

する人たちに囲まれて一緒に過ごしたいなあ」と幼心に思っていました。

また、日本の伝統文化である「剣道」を今日まで45年間続けてきました。剣道は、多くのことを教えてくれます。その一つに剣道では、練習のことを「稽古」と呼びます。稽古とは、日本で中世以降の学問に限らず芸能や武術を学ぶ時に用いられ、昔のことを調べ、今何をすべきかを正しく知ることを指します。つまり、日本人としてのアイデンティティを学ぶことができ、私は剣道で学んだ「日本人の心」を後世に繋いでいきたいと思い教員を志しました。

私が教員のなりたての若い頃は、ただ自分が一生懸命やっているということ、俗にいう「熱血教師」だけだったと反省します。教科指導やクラス経営さらには部活動指導において、まさしく「俺についてくれば間違いない」と自信に満ち溢れ、自分の発言や行動のみが正しいと信じていました。これまでの生徒たちの生育環境や現在置かれている状況を把握することなく、自分の小さな知見のみで判断し、生徒たちに一方的に指導をしていたように思います。今考えれば本当に恥ずかしいことで数々の失敗や経験を積んだことで反省し、その頃の生徒たちに卒業後に詫びたこともありました。生徒たちから「先生が一生懸命にやってくれたから今の自分があります」と言われた言葉には救われましたが、もっと経験豊富な先生方や周りの方々に耳を傾け素直に聞き、丁寧な指導を行っていたらと反省します。

そして現在、大学教員として、さらに明豊中学校、明豊高等学校、別府大学の剣道部総監督として指導しています。大学教員として学生らの専門性を高める指導をすることはもちろんですが、中学・高校の指導の中で大切にしていることは、「協調性」つまり「和を以て貴しとなす」という姿勢を身につけさせることです。私が高校時代に剣道日本一になったのは、剣道の厳しい稽古をこなすことはもちろんですが、私生活や寮生活で学んだ部分が大きかったように思います。私生活のすべてを剣道の修行に置

き換え、みんなで同じ釜の飯を食べて、ともに喜び、ともに泣く。状況を的確に判断し、あたり前のことをあたり前に行うことです。このあたり前のことをあたり前にできるようになるには、素直に人の話を聞くことができ、素直な中にも自分の柱をきちんと持っていることが大切です。他者の意見を受け入れて、自分でかみ砕き、正しいと思うことはしっかりと実践する。おかしいと思うことがあれば、もう一度教員に尋ね、理解できるまで追い求める。そんな生徒は必ず大きな成長を遂げると考えるからです。一人の大人として自分を確立する準備段階の大切なこの時期は、周囲の影響を受けながら抗い、もがき、悩みながら前向きに物事に当たる中で、教員からの適切な指導を受け、その経験を通して彼らは健康な自我同一性を獲得していくことができます。教員は、生徒と同じ視線に立ち解決策をともに考えていく。正に教育とは「共育」と表現する人もいるように「教員と生徒がともに成長していくもの」であり、幾多の経験を重ねて大きくなるものだと思います。

教員にとって、生徒・学生の成長が一番の喜びで、この仕事をしている大きな意味にも繋がると考えて、皆さんも常に現状に満足することなく「日々成長」を心がけ立派な教員になってください。

